

物語の舞台の村

志村 良知

シナリオライターの姪と積る話をし、その後感想や補足で長い手書きの手紙をもらった。その便せんが『アルプスの少女ハイジ』だったので何故かと電話で尋ねると、今ハイジはおとなに人気なのだという返事だった。

ハイジの村、マイエンフェルト（五月の野）はチューリッヒから車で二時間余り、既に大河の様相のライン川を遥に望むところであって、スイスの中の小国リヒテンシュタインに接している。

三〇年余り前の五月に訪れたときには村の広場にハイジ像はあったものの、観光客もまばらな純農村で、郊外のカフェ『ハイジホフ』も他に二組だけだった。牧草が刈られる前で花が咲き乱れる牧場が青空の下、雪の残る岩山をバックにどこまでも広がり、いやおうなしにハイジとペーター、クララの姿が浮かんだ。

物語の舞台になった村がみんなマイエンフェルトのような感激を与えてくれるかということ、そうとは限らない。現地には失礼であるが「がっかり」もある。

『小熊のプーさん』の中部イングランドのハートフィールド。村の真ん中に小さな駐車場付きの土産物屋兼観光案内所があるが、それだけ。地図をもらって広大なゆかりの地域を歩き回ってみても、田園風景は美しいがクリストファー・ロビンやプーさんが浮かんでこない。苦心惨憺探し当てた『棒投げの橋』もどろんとした川の水面に観光客が投げ込んだ無数の棒切れがひっかかっているだけだった。

これに比べると湖水地帯にある『ピーターラビット』のヒルトップは物語に出てくる設備や小道具満載のピーターの家があってわかりやすい。私たちはここでは幸運？にも、熱烈なピーターファンだという一人旅の若い日本人女性に話しかけられ、細かい蘊蓄を極めたハイテンションの説明を受けたのだった。

物語や歴史で有名な場所が「がっかり」になるかどうかは、訪問する者の対象への入れ込み具合によるであろうが、どうにもテンションの上げようがない、という名所もあるのも確かである。